五郎沼通信

第２４号 令和元年５月発行

この通信は、五郎沼の桜や周辺環境を守りながら、五郎沼の活用方法や今後のあり方を地域の皆さんと考えるために発行します。
（発行部数:２００部）

発行者：「五郎沼の桜を守る会」
事務局　瀬川峰雄
紫波町南日詰字小路口７０-１
電　話：019-672-2656
ＦＡＸ：019-601-2686
携　帯：090-2270-6771
m-mail：segawa@mineo.jp
Pcmail：info@shiwakankyo.com

今年の桜は長～く咲いていてくれました

４月27日（土曜日）午前中に赤石公民館企画で地元の赤石小学校の子どもたち数名と一緒に五郎沼を散策してみました。

ここ数年ゴールデンウィーク前には桜は散っていて残ってませんでしたが、今年の天候は咲き出したら急に暑いくらいの日が続き、満開もあっと言う間で、桜は１週間も持たないのではと思われました。しかし、20度が続くとその後に10度以下になったりの急変で、意外と桜は長く咲いていてくれて、まだまだ楽しめました。

ご存知の通り、五郎沼は一周ほぼ１Ｋｍと大変歩き安く、時間的にもゆっくりで１時間程で、丁度良い（子どもたちもあんまり飽きないコース）と思われました。

また、４号線沿いの雑木が無くなったことで、水面が近くに見え桜とのバランスも大変、良かったと思われました。

さあ、スタートだよ！
あいにく小雨だけど、満開だね･･･

今回は紫波町に住まわれたばかりの保護者さんも一緒でしたが、子どもたちと一緒に地元の小学校の近くにこんな歴史的な場所があったんだと、改めて感動していた様子でした。（事務局　瀬川）

草もきれいに刈り取られて、
歩きやすく整備されているんだね！

桜の植樹をしていただました

４月21日に紫波ライオンズクラブの方々より、山桜５本の苗木を植樹していただきました。

ライオンさんの植樹の様子

ライオンクラブの参加者さん

ハス池の整備

今年は肥料もやりました

４月６日に例年通り、史跡五郎沼愛護会と小路口地区の方々合同にて、古代ハス池の整備と同時に雑木の枝も、一緒に焼却しました。

まだまだ雑木の枝はありますが
徐々に焼却ししています

入口道路の決壊

数年前より、五郎沼入口付近で下の写真でお分かりの通り、擬木の柵が沼側に倒れている箇所があります。

擬木の途中１本が沼側に倒れています

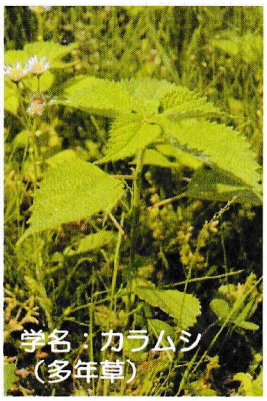
問題提起として町側に相談をして行きますが、町財政難の折に、時間がかかってしまい形骸化することのないよう、何とか早めの方法を模索して行きたいと考えております。みなさんのお力、お知恵を何卒宜しくお願いいたします。

五郎沼の草花

沼の堤体には桜以外に草花の最終回（緑草）も箱清水にお住まいの、三田地節子さんより説明を受けご案内します。

◀花期5-6月‥‥名の由来：はっきりしていない。日本固有種であり、かつては生垣として植えられていた。若葉は山菜として天ぷらやウコギ飯などにして使用された。

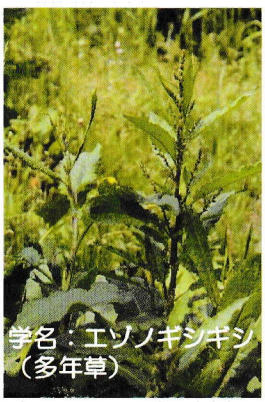
▲花期5-7月‥‥名の由来：子供たちが若い花穂を人形の紙にして遊んだことから。全草が青褐色で道端や畑に縁などに生えている。



▲花期8-10月‥‥茎を蒸して皮を剥ぎ繊維を作った事から。人里近くに多く生え、高さは1～2mとなるこの繊維は長くて丈夫なので越後上布を初めとして昔から上質の織物が作られていた。

▶花期5-7月‥‥名の由来：（カモジグサと同じで）草身の色が緑色であることから。カモジグサと似ているが外花頴（ｶｴｲ）に長い剛毛が散生して、内花頴が外花頴より明らかに短いことで区別できる。

◀花期3-11月‥‥名の由来：花穂を雀の衣類（帷子･ｶﾀﾋﾞﾗ）にたとえた事から。人家の周辺や道端やいたるところ生えている。高さ4-10cmで淡緑色の小穂を付け冬でも青さを保っている。



◀花期6-10月‥‥名の由来：巾の広い葉で茎や葉柄または茎の中脈がしばしば赤みを帯びることから。沖縄を除く各地に広く帰化している欧州原産の多年草で道端や荒地を好んで生えている。高さ0.5～1.3mになる。

五郎沼が築堤されたころ・比爪藤原氏の時代（12）

①乙和御前と佐藤一族

ひづめ館懇話会10周年記念事業として阿津賀志山の防塁と佐藤庄司一族の遺跡を訪ねる予定です。

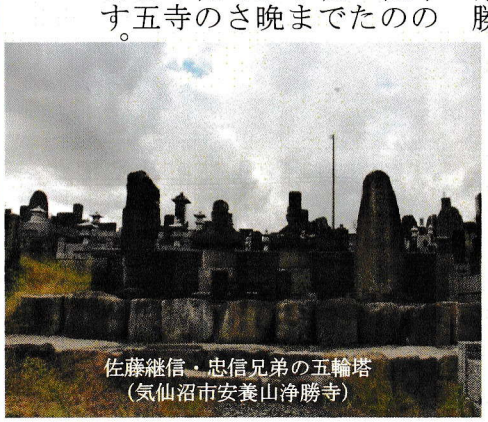
佐藤庄司基治（元治）は福島市飯坂の大鳥城を拠点とした豪族であり、奥州藤原氏とは強い絆で結ばれた一族です。基治の息子、佐藤継信・忠信兄弟は源義経の忠臣として有名ですが、共に義経の身代わりとなり、討死したと伝わっています。

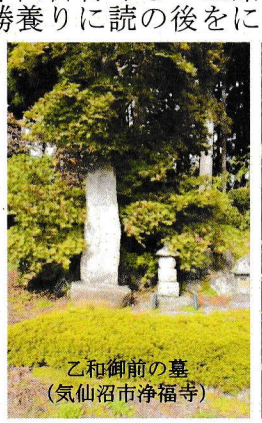
この兄弟の母親が乙和御前です。乙和御前は藤原清綱（樋爪氏初代）の娘ですが、この乙和御前については多くの逸話があります。

福島市の医王寺にはお墓とともに、息子を失った悲しみで、蕾が開花しないといわれる乙和椿があります。また、境内には佐藤庄司基治、乙和御前・夫妻の墓以外に、継信・忠信兄弟の墓（慰霊碑）や多くの供養塔が残されています。宝物殿には奥州にむかった義経は途上医王寺に参籠、遺髪を埋めて二人の追悼の法要を営んだ時、置いていったという、弁慶の笈等が展示されています。

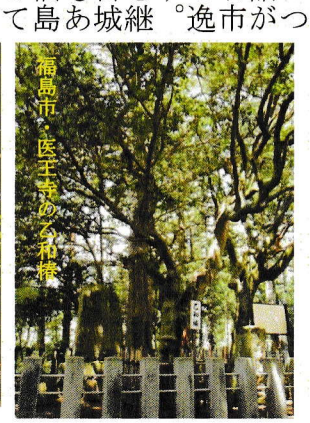
松尾芭蕉が奥の細道紀行の途次、立ち寄った場所でもあります。また、兄弟を失って悲しむ乙和御前を慰めるため、兄弟の妻たちが甲冑を身につけ、御前を慰めた逸話があります。宮城県白石市越河の甲冑堂にも同じ逸話が伝えられています。さらに、乙和御前と継信・忠信兄弟の墓は宮城県気仙沼市本吉町にもあります。乙和御前が福島に嫁ぐときに領地として与えられた場所（本吉町馬籠・山田・津谷）が伝えられています。奥州合戦で夫が自害し、乙和御前も後を追おうとしましたが、家来たちがかばって逃がし、本吉馬籠に身を寄せ、土地の人々からも心をこめてもてなされたことから信夫館に居を構え、馬籠で余生を送ったそうです。その後出家し、夫と息子たちの非業の死を思い念仏や読経に日を重ね、津谷村にお寺を建てて冥福を祈りました。それが海澤山養光寺（現在の安養山浄勝寺）だそうです。

また、乙和御前が今の奈良県吉野の水分神社の御霊を分けて頂き祀ったのが、津谷の御嶽神社であると伝えられております。さらに乙和御前が晩年、家臣に命じて建てさせたのが光明寺（現在の浄福寺）であり、この寺には乙和御前の石碑と五輪の塔が奉られています。（石幡談）


佐藤継信・忠信兄弟の五輪塔
（気仙沼市安養山浄勝寺）


乙和御前の墓
（気仙沼市浄福寺）

佐藤基治・乙和御前の墓
（医王寺）


福島市・医王寺の乙和椿